資料－２

有識者からの発表

「瀬戸内海の歴史と文化－島の海里山と生活文化－」

愛知大学大学院文学研究科　教授　印南　敏秀

今後の瀬戸内海の水環境の在り方懇談会資料

【発表者：愛知大学大学院文学研究科　教授　印南　敏秀　】

項　目	内　容
1. 発表テーマ	瀬戸内海の歴史と文化 ―島の海里山と生活文化―
2. 課題	瀬戸内沿海域や島嶼部は、海と深く関わった生活文化があった。白砂青松は、そうした瀬戸内海での生活文化のなかでつくりだされた文化的景観といえる。 白砂青松を構成する里海の藻は、里の畑地の重要な肥料となった。藻は肥料だけでなく、耕地の乾燥を防ぎ、傾斜畑の修理などにも利用した。港内の荒波を防いだり、身体や家、屋敷の清め、民間療法の石風呂など幅広く利用された。貴重な資源だったため藻の口明けや口留めを決めて、持続的な資源管理をおこなっていた。 里山の松は、台所や夜漁の燃料に利用し、各部を細かく使いわけ、呼び名も分けていた。なかでもゴ（松葉）は毎年再生産され、口明けや口止めがあった。松は建築材や農具や漁具の材料となるため伐らないで大切にした。海岸の魚付林の松は魚の保護、海岸の松林は防潮や風除けに役だった。松は日本を代表する神樹でもあった。 瀬戸内海の人々が長く生きりための資源として選択し、大切にまもってきた藻や松は、戦後の埋立て、海水・大気汚染などで伝統的な生活文化と共に消えようとしている。
3. 対応（提案）	民俗学は儀礼研究に偏り、調査項目も地域にあわせたものではなかった。里海・里・里山をあわせた海里山の生活文化は、日常と非日常をあわせ、瀬戸内海にそくした視点で考えないととらえられない。そのとき民俗学者宮本常一の昭和３０年代の撮影写真などは参考になる。 空間的に海里山の自然と生活文化が一体としてとらえられ、豊かな資源と伝統文化を伝える島で、新しい視点からの掘りおこしが必要である。
4. 今後の瀬戸内海の方向性について	島は沿岸部では消えた瀬戸内らしさを伝えている。しかも一島一島の海里山のあり方や歴史が異なり個性的で、文化多様性の宝庫でもある。 オシアミなどの遠浅で楽しむ遊漁も、資源が豊富な島だから残っていた。島での自然と生活文化の学際的調査と並行して、伝統的なオシアミなどを利用した実践活動を並行しておこなう。実践活動をとおして調査研究を検証し、瀬戸内らしさを発見するのである。 瀬戸内海の海里山の自然と生活文化を一体としてとらえ、調査研究と実践活動をあわせた生活文化学により、新たな方向性が見えそうである。

今後の瀬戸内海の水環境の在り方懇談会

瀬戸内海の歴史と文化
―島の海里山と生活文化―

東京国際フォーラム
平成22年12月3日（金）
愛知大学大学院文学研究科　印南敏秀

1、島の生活文化からの発見

1、宮本常一の視点（周防大島(山口県）生まれ）
①昭和30年代の高度成長期の写真から
800種の植物から、「里海の藻、里山の松」を選択し
白砂青松の文化的景観をうみだした、島嶼で生きるための生活文化が写しこまれていた。

2、藻の利用と管理の文化

1、近世の開発と人口増加。

①領地が固定し、干拓と治水で水田の増加。

＊無謀な開発の停止、林野保全の呼びかけ。

②島嶼は畑が急増

島名	江戸期 →	明治初年 →	増加率
佐木島	290(反)	2745	9、47
倉橋島	1000	8037	8、04
因島重井	957	5297	5、59

瀬戸内海沿岸部の江戸時代の耕地増加率
(中山富広『近世の経済発展と地方社会』清文堂、2005より転載)

2、畑の開発と採藻の開始

①倉橋島(現呉市)は延宝元年(1679)ころ
肥料として磯で春にホンダワラを採藻した。

②因島大浜と重井の入会採藻は天明3年(1783)

3、近世末に藻の売買がさかん。

①周防大島西方は採藻権購入、天保12年(1841)

・苗代の緑肥は水無瀬島、畑は平郡島(柳井市)や小島周辺で藻をとり肥料にした。

②小豆島長浜が干し藻を売る安政年間(1854～60)

・滝宮から買いにいくが高騰していた。

4、サツマイモと人口増加

①近世中期からサツマイモ栽培

エネルギーは米の3倍で人口増加。

イワシがサツマイモ（タンパク質不足）の栄養を補った。

＊藻はサツマイモの肥料（カリ）に最適だった。

②島は人口増加地帯で出稼ぎへ

周防大島東和町（現周防大島町）

畑　3、5倍（200年）　人口　約6倍（100年）

5、藻の利用の技術。

①肥料として畑に埋めこんだ。

②因島重井では「畑が真っ黒にみえた」

芋苗の乾燥防止に畑に振りまいた。

③向島立花では土砂の流失防止、法面の修理。

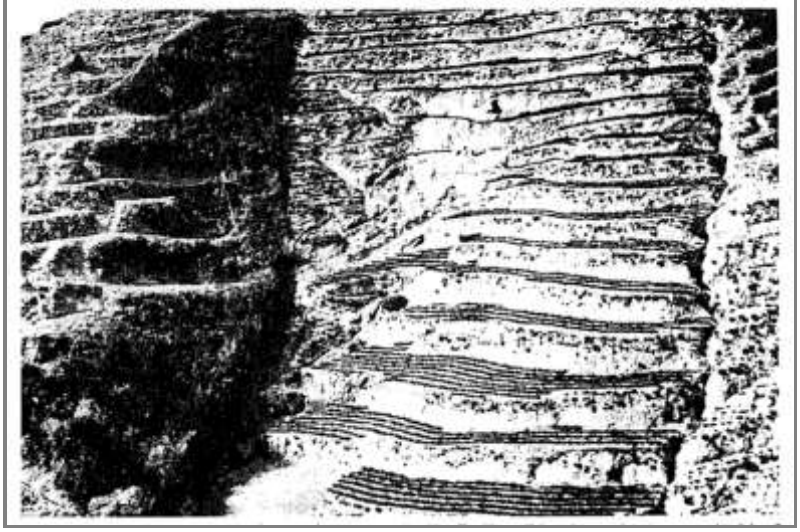
＊肥料のほか段々畑で複合利用。

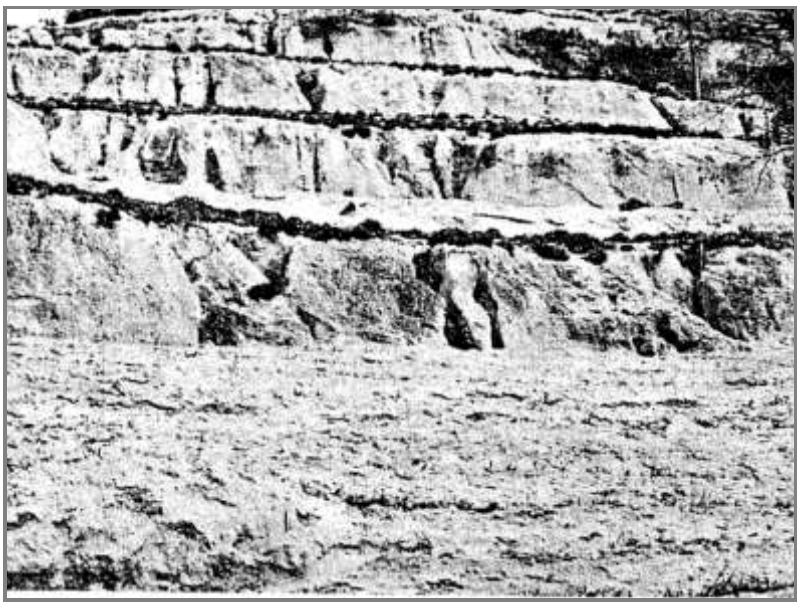
④小豆島では流れ藻は堆肥にした。

向島立花（現尾道市）

広島県立総合技術研究所農業技術センター提供（以下3枚も同じ）

〔3〕　急峻地の階段畑





石，海藻，いもづる等を利用して補修している

6、藻の資源管理
①「採藻」は口明け・口留め(里山も同じ)
・地先の藻は持続利用の資源管理。
②「寄藻」は入札
・浜に寄る寄藻の権利は入札で村の収入になった。
③「浮藻(アマモ)」は自由
・切れて流れる藻を船からすくい上げる。

以下の白黒写真は宮本常一が瀬戸内海で撮影。山口県周防大島文化交流センター提供。

7、藻にみる瀬戸内海の文化の多様性

①「万葉集」の「玉藻刈る」は、製塩のかん水（もんだれ）に名をのこす。

②港町御手洗から「港内採藻禁止願い」

③宇和島漁民が肥料採藻の規制を藩に願い出る。

④身体・家・屋敷の清め。

⑤民間療法の石風呂は、「藻」と「松」の里海・里山の複合（海里山）文化。

3、松の利用と管理

1、松の利用と技術

①山に「松が立っている」が誇り。

家・船の用材、背負い子、漁具（重くて腐りにくい）

②松燃料のゴは毎年再生産。

・ホク（株）・ワリキ(幹)・センバ(枝木)・コギ(枯枝)

ゴ（松葉）・ドングリ(松笠)と命名。

・ワリキ・センバは販売。

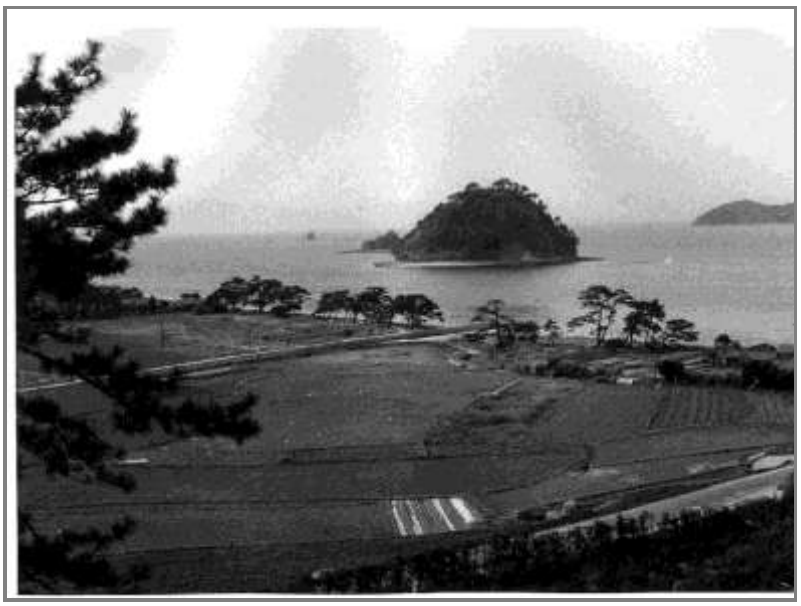
・海に適した松は夜漁の松明、家船の燃料、船たで等

＊マツクイムシで枯れた松しか伐らなかった。

漁や台所の燃料、販売

図IV-33 『三河奥郡漁民風俗絵図』の蒲郡の入江や河口で年中おこなわれ「ヨボリ（夜漁）」で使う松のジン（芯の松明

⑤魚の資源保護
海岸の魚付林が道路に代わり魚が寄らなくなった。
⑥海岸開発と防潮林
砂洲に松を植え陸地化し保護した
⑦防風の尾根松
港に停泊する船、峠の向う側の集落の風除け
⑧一里塚・境界松
目印に植え、伐れなかった。
⑨松は日本の神樹の代表
＊戦後松を利用しなくなり遷移した。



4、島の海里山の文化と活用

1、海里山をつなぐ生活文化学

①島は海里山の自然と生活をまとめて把握できる

日常と非日常のまとめて生活文化として把握する

多島海の瀬戸内には豊富な資源と伝統文化が残る

② 伝統文化と430種の魚介類をいかす

藻場でエビ・タコ・雑魚をオシアミでとる喜び。

「見て・触れ・遊び・学び・食べ・体感し・記憶に」

家族・仲間・地域で作る瀬戸内海の生活文化学。

第3回市民ひがた交流会・2010年7月10日―
オシアミを手に解説する岡田和樹氏（ハチの干潟
調査隊代表）

2010/

参考文献

四手井綱英『森林Ⅰ～Ⅲ』法政大学出版局、1985～2000。
柳哲雄『里海論』恒星社厚生閣、2006。
武内和彦他『里山の環境学』東京大学出版会、2001。
印南敏秀『里海の生活誌』みずのわ出版、2010。
同　『東和町誌島の生活誌　くらし・交流・環境』周防大島町、2004。
同　『東和町誌石風呂民俗誌』周防大島町、2002。
印南・佐竹・三浦他編『瀬戸内海事典』南々社、2007。